

## いよいよ最大の謎解き！ - 賃金と搾取のヒミツにせまる

09.6.4

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

### 一。前回までのおさらい

商品とは...その二つの性質

商品はまず第1に、人間のなんらかの欲求・必要をみたす（有用性という）性質をそなえているもの＝「使用価値」という。

他のものと交換されるという性質＝交換価値

\* 交換価値の本質は、人間労働の生産物ということ

\* 人間労働の結晶のことを、「価値」といいます（目には見えない）。

使用価値をつくる労働が「具体的有用労働」。価値をつくる労働が「抽象的人間労働」。労働の二重性。

商品の価値の大きさはどうやって決まるか

「商品の価値の大きさは、その商品を生産するのに社会的に必要な平均の労働分量（＝労働時間）によってきまる」。つまりどれだけ「手間ひま」がかかったか

商品経済が発展してくると、貨幣が生まれる。

\* 他の商品の価値の大きさを一手にあらわす商品が貨幣となる。「金 gold」。

\* 私たちが使っている「お金」は、貨幣である金の代用物。

貨幣所有者は、市場で「労働力」という商品を見いだす - 資本への転化の出発点

### 二。労働力とは何か？

1. 労働者は、労働力という「商品」を時間決めて売っている

「労働」と「労働力」は違う

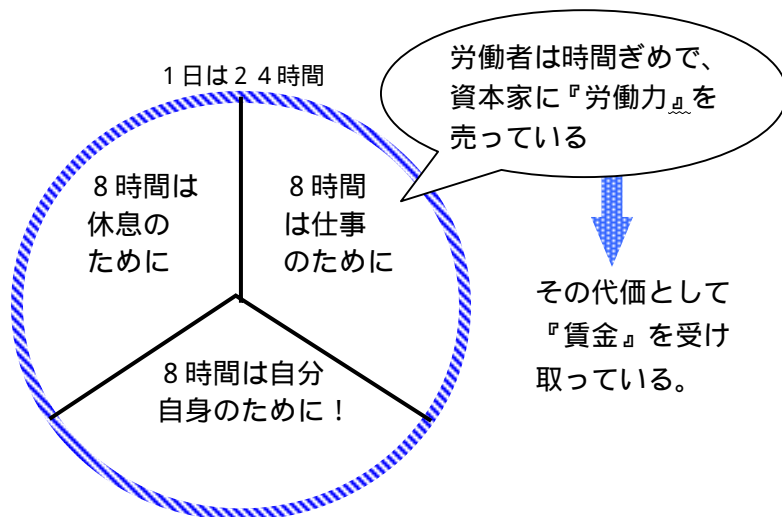
\* 「労働」は、生産手段（土地、建物、機械、原材料など）と労働力が結び合わされないと行なえない。労働者は、「労働」は売れない。

\* 「労働力」は、労働者の体に備わっている、身体的・精神的エネルギーのこと

「奴隷」と「労働者」の違い

\* 奴隷は、その肉体、人格もふくめて、人間まるごとが商品となり、奴隷主の所有となる。

\* 労働者は、自分の体に備わっている「労働力」のみを資本家に売る。



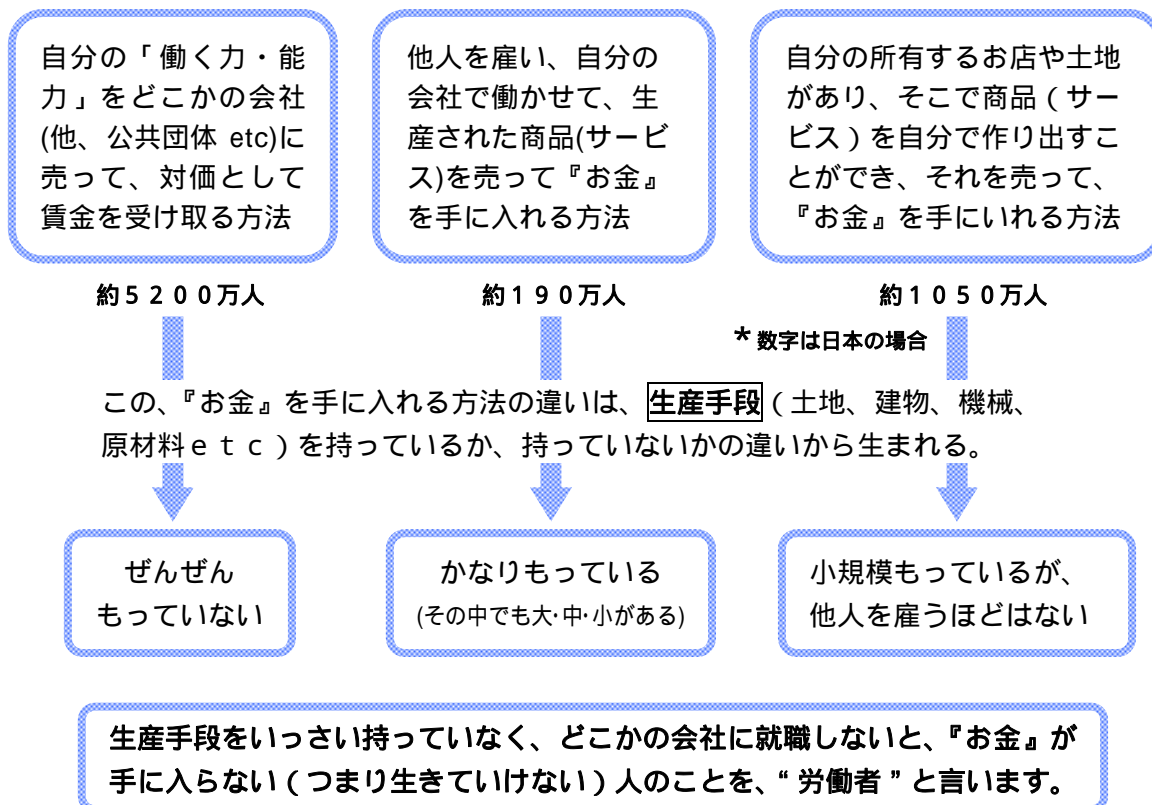
そもそも、労働者とは・・・

\* 厳密に定義すると、「はたらく人」=「労働者」ではありません。

\* では、労働者とは、だれのことが。

「お金」をどうやって手にいれるかの違い

【今の社会で、『お金』の手に入れ方は、主に3とおり】(子ども・学生・年金者などはのぞく)



ちなみに、 は「資本家」、 は「自営業者・農漁民など」

【二重の意味での自由】

自分の労働力を自由に売ることができる。人格的な自由。

しかし、自分の労働力を売る以外に、生きていけない。生産手段からの「自由」。

労働者と言われる人々の特徴

数が多い

ひとりでは弱い存在

だから、団結する



団結するための恒常的な  
組織が、**労働組合**。

(第6講義で詳しく)

### 三。労働力の価値（賃金）の大きさはどう決まるか

1。労働力も商品ということは...

他の商品と同じように、「使用価値」と「価値」がある。そして、価値の大きさは、

「労働力の生産に社会的に必要な労働時間の大きさによって決まる」

\*そして、「価値」を基礎に、売買がされる。

「労働力を生産する」ってどういうこと？



おはようございます！  
今日も元気な労働力を  
持ってきました～。

労働力エネルギー満タン！

労働開始前

エネルギーもう  
なくなります！

次の日、またこの状態  
に労働力を回復させな  
ければならない。

1日仕事をすれば、  
精神的にも肉体的  
にも消耗します。

8時間  
経過...

疲れたあ。  
もうだめ...

労働力の再生産...

そのために必要な費用は... How much !?

## 2. 労働力の価値の3つの要素

労働力の所有者である労働者本人の生活費。

\* 「明日も、来週も、来月も」元気に働けるエネルギーを補充するために。衣食住の費用。さまざまな必要・欲求を満たす商品・サービスにかかる費用。

家族の生活費。養育費。

\* 労働者は、いつかは寿命がつかたり、老齢となって労働することができなくなります。しかし、労働力はたえず市場に補充されなければなりません。そのためには、次の労働者を育てることが必要だからです。

知識・技能・熟練に必要な養成費。

\* 特定の知識や技術や熟練を身につけるために支出される養成費も必要です。

### ここに注意！

労働力の価値どおりに賃金が支払われても、

**資本家はもうけ（剰余価値）を獲得する！**

商品売買の基本は、等価交換というのが原則です。

資本家は、等価交換をつうじて、合法的に価値を増やすのです。

そのしくみを、マルクスは解明しました。

\* ただし、価値どおりに賃金が払われていないのが、今の日本の現実です。

\* 価値を基礎としながらも、実際の賃金は、労働者と資本家の力関係で決まってくる。企業単位の力関係および、社会的に見た労働者階級と資本家階級の力関係（最低賃金制度、労働法制破壊による非正規労働者の増大、春闘など）。失業者の増大も全体の賃金を押し下げる力に。

## 三。搾取のヒミツ

### 今日の学習の前提として

今日の「搾取のしくみ」の学習は『生産労働』でのしくみであること。



簡単に言えば、  
「ものづくり」を  
している職場です



父ちゃんは今日  
もがんばるぞ！

\* 商業、金融、サービス、公務労働など、生産労働以外の「搾取のしくみ」は今日学習するものとは若干違ってきます。しかし、今日学習する内容が、「搾取形態」の基本となりますので、これをまず理解することが大事です。

今日学ぶ内容は、純粋な理論学習ですので、わかりやすいように生産過程の定式や数値などはかなり単純化しています。実際の搾取形態はもっと入り組んでいて複雑ですが、今日学ぶような基本的なしくみを押さえることで、より具体的な事例を理解することが可能になります。今日はそうわりきって学んでください。

1. 資本とは何か（先週のおさらい）

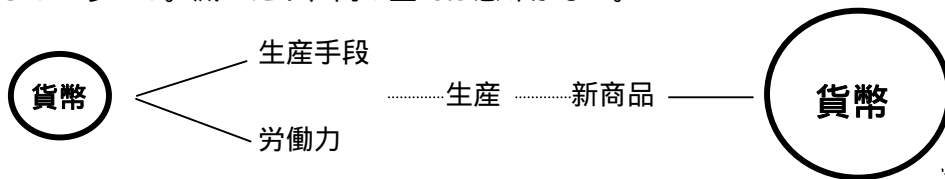
私たちが労働力を売るのは、「使用価値」（商品）が必要なため

**商品 - 貨幣 - 商品** が私たち（労働者）のお金の流れ

これに対して、資本家が労働者の労働力を買って商品生産をする流れは...

**貨幣 - 商品 - 貨幣** ということ

しかもここで重要なことは、はじめの貨幣量よりも、おわりの貨幣量が大きくなるということ。減ったり、同じ量では意味がない。



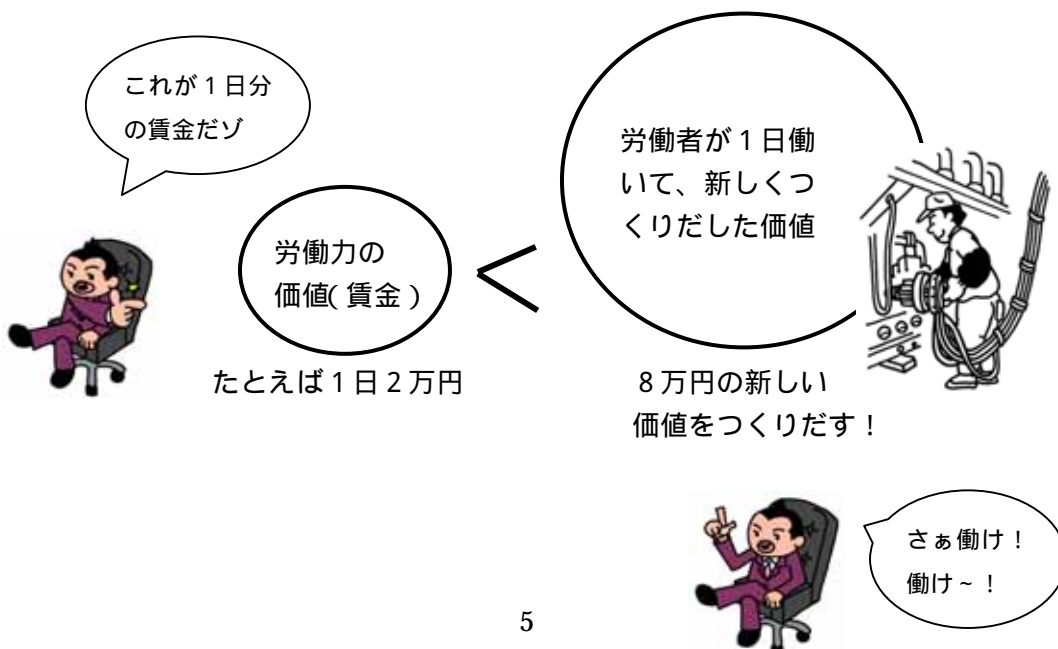
この運動の目的は、貨幣の増加、つまりより大きな貨幣（価値）の獲得にあること。 **資本 = 自己増殖する価値のこと。**  
では、なぜ「はじめ」より「おわり」が大きくなるのか。

これが目的  
にならざる  
をえない！

2. 搾取のヒミツの解明

**労働力という商品の独特の性質をつかむこと** が大事！

労働力の1日分の価値と、その労働力の1日（ここでは分かりやすいように8時間労働とする）の使用があたらしく作りだす価値は、大きさが異なる。そして、それは必ず、後者の方が大きい。

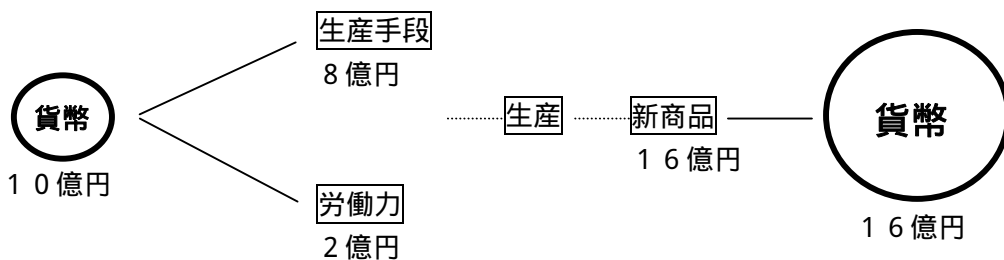


生産力の高い発展段階

\* なぜ、「労働力の価値」よりも、「労働者がつくりだした新しい価値」のほうが大きくなるのか。それは、資本主義的生産が、高い水準の生産力を持ち、「自分の生活を維持していく分（労働力の再生産費）」よりも多くの価値を、契約した時間内の労働で生み出すことができるのです。

\* そして、この「労働力」という商品の特別の性質が、資本家が労働者を雇って労働をさせれば、より大きな価値が得られる、隠されたしくみになっているのです。

図式にしてもう一度（単位を億にしています）



\* 労働者がつくりだした新しい価値

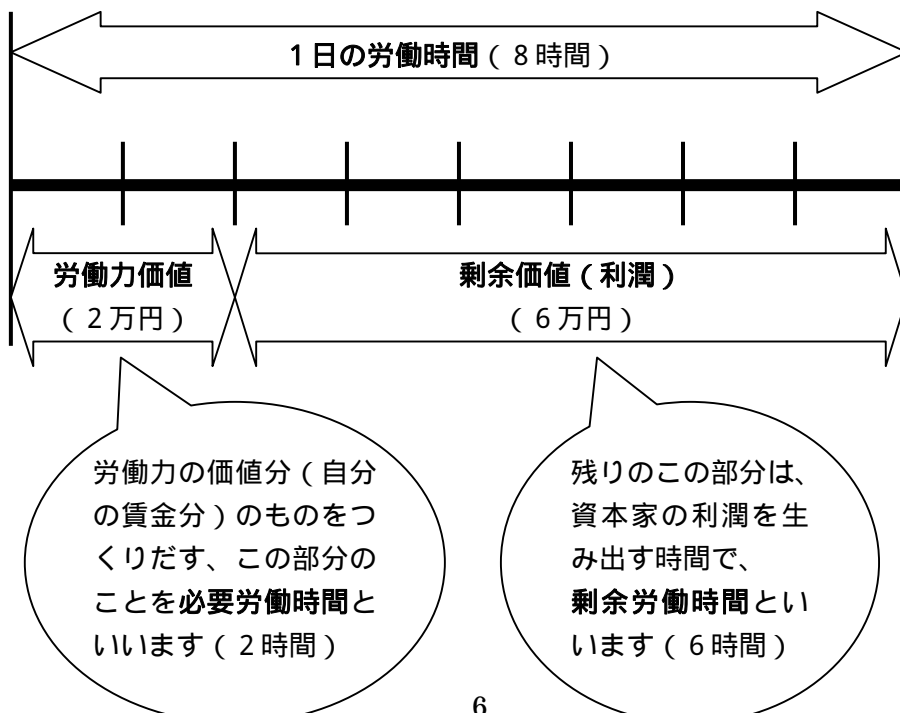
新商品の価値(16億円) - 生産手段に投じた価値(8億円) = 8億円

\* 剰余価値（利潤）

労働者が新しくつくりだした価値(8億円) - 労働力の価値(2億円) = 6億円

この6億円のことを、マルクスは **剰余価値** と呼びました。

\* このしくみを、労働者の1日の労働時間で考えてみましょう

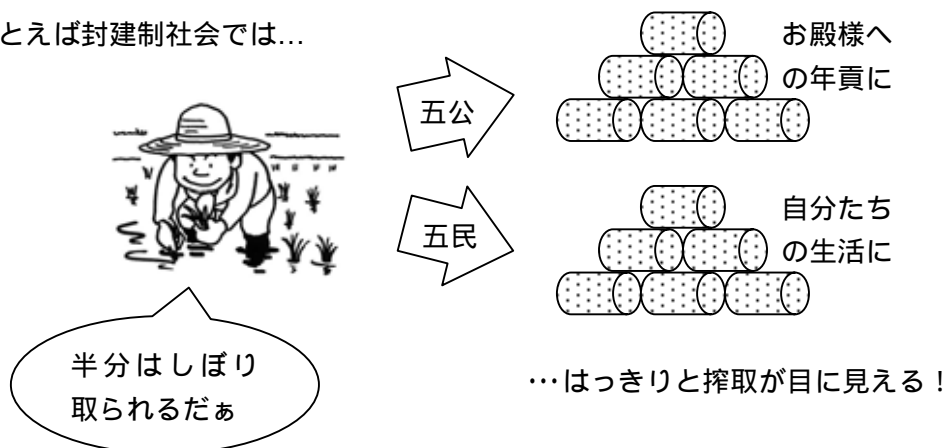


このように、自ら労働して価値を生み出さないものが、他人の労働の成果の一定部分をうばいとることを、**搾取**（さくしゅ）といいます。

\* 搾取は、原始共産制社会以降の、いつの時代にもありました、しかし…

**資本主義の搾取は目に見えないのです！**

たとえば封建制社会では…



実際の賃金形態が、搾取の本質をつつみかくす

- \* 労働者の賃金はたいていの場合、月末払い。つまり後払い。労働者は資本家に、労働力商品の信用貸し（簡単に言うと“つけでいいよ”）をしている！私たちが多く体験する商品売買（前払い）と形態が違う。
- \* パート労働者は「時間給」 何時間働いたかによって賃金が決まる。
- \* 成果主義賃金 どれだけ働いたか、成果があがったかで賃金が決まる。

こういう体験を通じて、**どれだけ働いたか = 賃金の大きさ**という観念ができあがる。「労働の価格」のように見える。

「現実的関係を見えなくさせ、まさにその関係の逆を示すこの現象形態は、労働者および資本家のもつあらゆる法律観念、資本主義的生産様式のあらゆる神秘化、この生産様式のあらゆる自由の幻想、俗流経済学のあらゆる弁護論的たわごとの、基礎である」  
（『資本論』第17章 924P）

「現象形態は、直接に自然発生的に、普通の思考形態として再生産されるが、その隠れた背景は、科学によってはじめて発見されなければならない」  
（『資本論』第17章 928P）

まとめ。

**資本主義社会の搾取は、学習しないとわからない！**

労働者は、学ばなければ、かしこい労働者にはなれない。

## 四。商品の“命がけの飛躍”

これまでの話は、つくった商品がきちんと「売れる」という前提でお話をしてきました。ところが、実際はそうではないことは、みなさんもよく知ってのとおりです。

### 1. 売れるかどうか、わからない

もう一度、「資本」の基本運動をおさらいしましょう。

**貨幣 - 商品 - 貨幣** ということでした。

最初の「貨幣 - 商品」はスムーズに進行します。

が、「商品 - 貨幣」はそうはいきません。マルクスは、この過程を「**命がけの飛躍**」と名づけました。なぜか。

**商品が実際に売れるかどうかは、市場に出てみないとわからないからです。**

その商品を買ってくれる需要が実際にどれだけあるのか、同じ商品をつくる業者がどれくらいいて、どれだけの商品をどんな値段で売りに出すのか、そういう事情は固定したのではなく、たえず変動しています。

- \* 自社の「新商品」の開発がうまくいくかどうかわからない
- \* 他社が自社の商品よりすぐれた商品をつくりだすかもしれない
- \* 他社の生産技術が進歩し、より安い価格で同じ商品売りだすかもしれない
- \* その商品の供給が、需要より上回っているかもしれない（過剰生産）

だから、せっかく商品をつくって売りにだしても、買い手がみつからなかったり、市場での売り値が下落してその商品の生産にかかったもとの費用も回収できなかったり、**資本家はそういう危険にたえずさらされています。**これは商品生産の社会の、ぬけだすことのできない宿命です。

### 2. 資本家どうしの「命がけの競争」が宿命となる

競争の敗北者は、倒産・廃業します（労働者の失業をとまなう）

- \* この法則は、資本家どうしの激しい競争とある部分の敗北、没落という形で、多くの社会的悲劇を生みながら作用します。

搾取強化へ

- \* より大きな資本をもとでにし、より高い生産力・生産技術・販売方法を生みだし競争力を強化して、**商品売り続けることを資本家は強制されます。**したがって、資本家の利潤獲得欲求には限度がありません。
- \* そのために、できるだけ大きな剰余価値の獲得 = 労働者への搾取強化（労働者への犠牲）をすすめるのです。来週はそのお話です。

次回講義（6/11）は「ワークとライフのバランス - 労働時間とはなんだろう」です！